

## “アンメ牧師歓迎” 特別演奏会 再報

すでに7月号月報でお知らせしましたように、グンドルフ・アンメ牧師夫妻が、ドイツ・東アジアミッション代表団の一員として、9月に来日されます。

東京バッハ合唱団では、これを歓迎し、下記のとおり特別演奏会を催します。

どなたでも、ご自由にご来場ください。入場無料です。

来日を前に、アンメ牧師からお便りが届きましたのでご紹介します。

ベルリン-ケペニツク

2000年7月26日

お手紙をととてもうれしく拝見しました。私たちの(長男)ヨハネスが埋葬されて4ヵ月になりました。5月14日のコンサートで、バッハ合唱団の皆様が、私たちにお寄せくださったお心づくしによって、私たちは慰めと勇気を与えられました。お送りくださったカンタータのテキストを、深い共感をもって読みました。本当にありがとうございました。

9月2日に、私たちは出発して、フランクフルト、ソウル経由で成田に向かいます。日本で皆様と再会するのを、たのしみにしています。あなた方の、9月9日のコンサートを、今から大きな喜びをもって期待しています。またその日の昼・夕食のご招待と、団員の方々との集いを予定して下さって、ありがとうございます。

9月10日(日)10時20分の信濃町教会の礼拝に、南吉衛牧師が私たちを招待してくださいました。私は、マタイ福音書28:16-20(弟子たちの派遣)について、「教会の使命」という題で説教をします。

最近、私たちはハノーファーの万博に行ってきました。この絵葉書は、キリスト館内にあるエクスポ教会の、道しるべの十字架(27メートル)の中庭です。

どうぞ、バッハ合唱団の皆様に、くれぐれもよろしくお伝えください。

バーバラとグンドルフより



### 特別演奏会

2000年9月9日(土) 16:00-17:30

会場:世田谷中央教会

#### プログラム

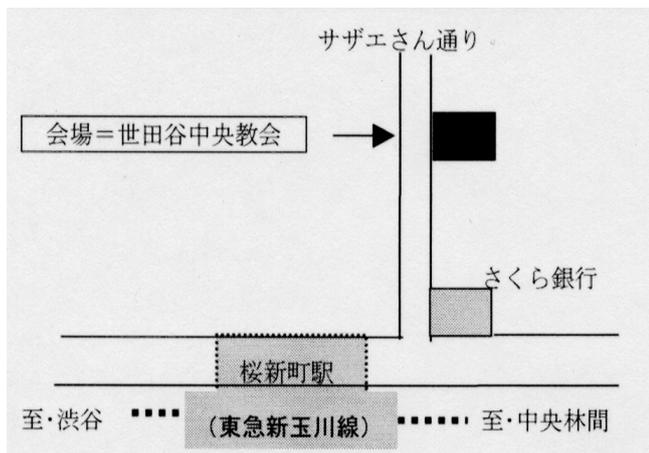
- ①合唱:カンタータ 106 番《神の時は いとも正し》  
(BWV106)全曲…原語
- ②あいさつ:グンドルフ・アンメ牧師
- ③合唱:小ミサ曲ト長調(BWV236)より…原語  
キリエ、グローリア、ドミネ・デウス、  
クム・サンクト・スピリトゥ

#### 演奏者

ピアノ:内山亜希  
合唱:東京バッハ合唱団  
指揮:大村恵美子

#### 入場無料

(会場下車駅:東急新玉川線「桜新町」4分  
(世田谷区桜新町 1-14-22))



## 21世紀には世界中で《クリスマス・オラトリオ》が歌えるか？

大村恵美子

森首相の「神の国」失言以来、にわかに神学論めた論争が政治の世界でもわき起こりましたが、日本の一般の人たちの多くは、一言のもとにナンセンス、と否定的に反応したようで、そのことも私には興味深く思われました。

首相が国民に向かっての発言としては、ナンセンスでありましょうが、一方、「一木一草にまで神が宿っている」というアニミズムは、なにも日本の土地だけではなく、つきつめれば地球上の全域において、あてはめられなければ、なんの妥当性もないものでしょう。そのような狭いナショナリズムは論外として、そういうアニミズム的多神教が、融通の利かない、したがって好戦的・攻撃的な、一神教よりもすぐれたものである、という考え方は、けっこう日本人の心情を代表しているように思えます。

しかし、「一木一草に神宿る」というのと、「一木一草に創造主（神）の愛、恵み、志（地球における共生）があらわれる」というのと、それほど大きなへだたりがあるのでしょうか。前者は、わが存在のたよりなさを、外界のすべてを敬うことによって、それらのタタリを免れ、利益をこうむりたいという、原始的な功利心のあらわれで、それに対し、地球を含む全宇宙が、唯一の存在の意志から発して存続を成り立たせられている、という一神教的な考えの前段階にあるものではないでしょうか。

### 共生を可能にするには

多神教的文化のほうが、争いを起こすことが少なかったかどうか、統計的なことはわかりません。しかし、自分以外の他者に脅威を感じて、おそれかきこむ心情は、日本の多くの新興宗教にも共通するように、朝起きたら四方拝、燈明をあげ、かしわ手を打ち、ありとあらゆる宗教的恭順をつぎつぎにこなす、という行動にあらわれ、事なかれ主義的な「和」の人生に至ります。

他方、一神教は、そのような「偶像礼拝」に誠実のないことを知っていて、祖先の神、民族の神、共同体の神に忠誠をつくすことに、人生の意義を見出しがちです。

ところで、地域によって、強調されどころがちがう唯一神ではあっても、それぞれの神は、人間に何

を要求しているのか。神をおそれかきこみ敬え、他者を殺すな、自分自身と同じように愛せよ。このような、倫理の黄金律は、みな共通なのではありませんか。

水の限られた地域で、泥水を飲料にしている部落の上では、なみなみと水を張ったプールで泳ぐ。自分たちの礼拝所でない、他の宗派の礼拝所に爆弾をぶちこむ。そのような日常生活は、自分自身たまらないと同じように、相手にもたまらない苦痛です。功利的な面から言っても、売り手は買い手を必要とし、男は女を、南は北を、すべて存在するものは相手を必要とします。相手が損なわれれば、自分も損なわれるのです。

### 欲をはなれて、裸のみどり児を

そこまでつきつめずに、これまでの人類は、まるで陣取りゲームのように、それぞれの立場を主張して、地球上の末端まで追いつめ合って来ました。

史上にあらわれたナザレのイエスも、ムハンマドも、限界ある歴史の一点において、有限の人間としてその生涯を生きました。彼らを神の子というのか、師というのか、友というのか、それぞれにニュアンスのちがいはあっても、他宗教の人たちも、その宗教的卓越性をみとめ、自分たちの信ずる神に愛されたものとみとめています。

それならば、21世紀には、熾烈な譲歩の論戦をつらぬいて、神に愛される人間の、たがいに愛し合う道を拓いてゆくべきではないでしょうか。表現様式の多様性をみとめ合いながらも、人間みな神の子、という大前提に到達してゆけないものでしょうか。

むかし私がアルザスの片田舎でみた教会は、プロテスタントとカトリックの村人たちが、礼拝とミサを時間をずらし合うことで、同じ空間を使っていました。また、テゼ共同体の祈りの家では、どんな形態でも、どんな宗教の人でも、沈黙をまもるという一点を心得て、いつでも出入りして祈っていました。

声高に自分の立場をおしつけること、力づくの者が上位を占めること、これに「否」をつきつけて、神の意志が、小さいもの、低いものをみとめ共存させることにある、と身をもって示されたのが、あの寓意的な、裸のみどり児イエスの、馬小屋での誕生物語でした。

現代の私たちは、その表徴を、甘いお菓子やたのしい音楽、美しいカードにして、リッチなクリスマスをわれわれ好みに演出し、作り上げています。これでは、世界中の、欲にかられた大衆を大いに喜ばせる代りに、まじめなもろもろの宗教を信じる人々

の心を遠ざけるだけでしょう。もっとも、あのきれいなカードやプレゼントほしさに、教会にひきつけられる子供も多いのは確かですが、大人も、多かれ少なかれ、文化の魅力でむらがりつどい、他の、より質素な宗教を軽蔑したりします。

さて、わがバッハの《クリスマス・オラトリオ》は、21世紀の世界中の人間に、どのようなメッセージを伝えるのでしょうか。歌いながら、聴きながら、世界の平和の可能性を探ね求めようと思います。

## 心のふるさとを求めて

— 出口禎子さんのこと —

大村恵美子

出口禎(さち)子さんは、1982年来、ソプラノ団員として歌いつづけて来られました。1997年のドイツ演奏旅行以後、お仕事の関係で練習曜日に出られないということで、後援会員になっていらっしゃるようです。

その出口さんから、おたよりと一緒に、昨年出版なさったという一冊の本が届きました。『精神科看護における実践研究——日常生活行動の援助を通じてのアプローチ』。そして著者紹介は、こうなっています。

現職／東京慈恵医科大学助教授・看護学博士

専門領域／精神保健看護学、看護実習

略歴／北里大学病院で12年間臨床看護婦として勤務した後、玉川大学大学院教育学研究科修士課程、日本赤十字看護学研究科博士後期課程修了、東京慈恵会医科大学講師を経て現職

もう何か、本を読ませていただく前に、圧倒される思いでした。長い団員生活の間には、出口さんの悲鳴に近い訴え、「時間がない」「調整がつかない」が、たえず彼女にはつきまとい、今度はどうか、とハラハラしながらも、定期演奏会ごとに、ドイツ演奏旅行ごとに、また様々なイベントがあるごとに、みごと参加してこられたのです。ある時には、そんなに長い休暇は無理なのだけれど、陳情書のようなものを出してみたら、と言われて、私も、合唱団主宰者として、この方はソプラノ・リーダーとして、当合唱団の演奏旅行には欠くことの出来ない立場の人である、という証言を上司あてに書いたものでした。

しかしそれどころか、彼女は正規の団員の役割のほかに、自発的に、私の教会の聖歌隊の仕事を手伝ってくださったり、〈ばっはめいと〉の個人レッスンで、田中奈美子先生のご指導をうけたり、そのどれもが一通りではない、徹底した熱心さで取り組んでこられたのです。

ここ2,3年は、また勉強に忙しくて時間がとれない、と伺っていましたが、その間にこんな労作を著され、そして看護婦から学生へ、講師へ、助教授へ、と変身してゆかれたのでした。あまりにもすばらしい近況ご報告でした。

禎子さんから、思春期の時に、たったひとりの肉親であった母親と死別し、キリスト教信仰の深い恩師のもとで育てられたと伺い、その明かるく積極的な生き方に、つねづね尊敬を感じていました。合唱団の方々といつも楽しげにうちとけ、よく笑いころげるので、彼女の休団中は淋しくなります。

私も、父親を幼い時に失いましたが、健康だったおかげで、病院とはおよそ縁のない生活をしてきましたので、ああいう大きな施設に一日中収容されて暮らす生活、またそこで他人を看護する仕事など、自分には想像もつかない、とてつもなく大変なものだと思っただけです。ときどき、乳幼児から高齢者までの、いろいろな目的をもった施設を訪問したり、また近年は老人向きの住居などにも伺ったりすることがありますが、それらの必要性は、頭ではわかっている、できれば自分は、一日中他人の目を気にすることのない、まったく自由な空間でひっそりと老後が送れないものかと思っているのです(目下の現状維持がいちばんの理想)。

私の小学校時代の恩師が、長年、夫人とのお二人の生活のあと、脳梗塞で、特養施設に入られ、何度かお見舞いにゆきました。先生は、夫人が夕方帰宅なさるのを嘆かれ、一日中他の人々との交流を拒んで、ただただ個室でしずかに寝ておられました。私も、自分の姿を見るような気がしてなりません。

さて、とっつきにくい固い標題の、禎子さんの著書を、心して丹念に読みはじめました。そこに繰りひろげられたのは、該博な勉強の成果に裏づけられた、彼女のフィールドワークにおける、生き生きとした生活日記でした。私は何度も胸をつかれて涙せんばかりでした。形式こそ、平静につづられた研究報告ではありますが、そこで彼女が出会って、私たちに訴えたかったことは、哲学であり宗教であり芸術でもある、他者との出会いの神秘の解き明かしな

のです。切ない人間実存の真実なのです。

彼女は、特に強い引きこもり症状にある患者に心をひかれます。「研修生DがはじめてMさんと接したとき、自分自身をMさんの位置に置き、幼い頃の寂しかった経験や温かさを求めて泣いた経験を無意識のうちに想起し、Mさんが発する無言のメッセージを受け止めていたのである。これが援助者側の因子である。そこには、Mさんと研修生Dとの間に共感という接点による見えない交流が起こっていたのではないかと考えられる。」

なんとという尊いお仕事でしょうか。私はかねがね思っているのですが、現在、人手不足と思われ、きつい仕事とされている職業は、私たちの、とらわれた考え方によって生み出されていると考えられます。もっと尊敬され、社会的に認められるものとして、看護、保育、ひいては幼少年教育などの職業を、これだけ不足、と責任をもって政府がPRし、助成して、所得をふやし、何交替にもして自由時間をふやし、待遇改善して必要な人数に近づけてゆく。また、将来外国人労働者が必要とされる、きびしい仕事も、就業時間の単位を小分けにして、誰でも生活の小部分をさいて従事できるようにすれば、安い労働力として外国人を入れる、というような、新しい階級づくりの弊害を生み出さないでもよくなるのではないか。差別される外国で、その国の人たちより劣悪な仕事を引き受けさせられる外国人が、しあわせなはずはありません。それよりも、社会に必要な仕事は、精神的に高度なものでも、肉体労働によるものでも、社会の必要度に応じて尊重され、厚遇されるような国になるべきではないでしょうか。

出口さんが一人で過度な勤務に追いまわられず、休暇をとり、健康を保ち、そして合唱団で安心して歌えるような時が、一日も早く来ますように、祈ります。

バッハ合唱団の皆様、出口さんの世界にふれ、交流をゆたかなものにするため、どうぞこの著書をお読みください。ご自分で購入されなくても、もよりの図書館に希望を出せば、必ず買ってくれます。

出口禎子著『精神科看護における実践研究』

発行 文憲堂

〒163-8671 東京都新宿区大京町4番地

電話 03-3358-6370

定価 2000円 振替 00140-1-123289

なお、この本の中では、「コーラス活動の治療的意義」が、本文153ページ中、1割弱にあたる13ペー

ジをさいて、強調されています。禎子さんのキャリア一躍如たるところです。ほんとうに、人の集まる場所、どこでも、コーラスはプラス効果を生み出すのです。

禎子さんが、玉川大学で修士課程を終えた日、私は式に参列し、近くにお住まいの団員、福中香穂子さんのお宅で、超豪華なお手料理でお祝いしたことを、昨日のここのように思い出します。たえない努力を重ねる人には、同じ年月がすばらしい実りをもたらしてくれるものだと、つくづく感じます。禎子さん、ほんとうにおめでとう！

## 『カントル・バッハ』を読んで

天田 繫 (団友)

1985年に「ルターとバッハの足跡を辿って」というツアーに参加して、ドイツでばったり大村先生とお会いして、びっくり、大喜びしたのでした。そしてアイゼナッハのバッハの生家でも、また、時間が同じ(たしかコンサートをしていたのでした)で、再会しましたね。あれからもう15年、速いものです。『カントル・バッハ』を読みながら、あの時たずね歩いたところをなつかしく思い出しながら、大バッハもこの地上では闘いの人であったことを、もう一度教えられました。

初めて知ったこと ①バッハも少年時代、うっとりするほどの美声だったとは。

②バッハが1ヵ月弱とはいえ、なんと牢の中に閉じ込められたとは!?

③アンナ・マグダレーナが、夫バッハの死後そんなに苦しい生活を強いられたとは。

ぜいたくな図版・カット等が、折りになんてちりばめられ、読む人のリアリティーを増してくれます。人間バッハの苦しみも、音楽家の栄光の裏にしっかり見えてきて、親しみやすい文であり、一人でも多くの方におすすめしたいと思います。

『カントル・バッハ』をご注文ください

団員だけでなく、団友、後援会員の皆様にもお読みいただきたいと思って発行しましたので、まだ残部がかなりあります。皆様からのご注文をお待ちしています。

(送料とも1200円)。

合唱団出版部